

### 詩文字が創りだす豊かな音読の世界 ～ 思いを伝える創作文字は詩の音読の楽譜 ～

神奈川県相模原市立大沼小学校 齋藤 浩

#### 一 はじめに

四年生の詩の授業のねらいは、「人物の気持ちを想像しながら声に出して読む」というものである。だが、ある一つの表現に着目し、「ここでの表現から人物のどんな気持ちかわかるか」と発問しても、なかなか子どもから芳しい反応は返ってこない。自分の解釈に対して自信がもてていないからである。

指導方法について悩んでいたとき、井関義久先生の著書『学び方を学ぶ分析批評』（明治図書）を読む機会があった。その中で解釈の仕方について、次のように指摘されていた。「作者が何を考えているか、ではなく、読者としてどう考えるか、なのだ。だから、当然のように、自分の問題意識にひきつけた曲解に基づいて、勝手に納得することもある。」

私は、それまで正解を求めあまり、全員に同じような解釈を求めていた。それでは、自分の感じた意見を述べるどころか、人物の

気持ちを想像しながら読むことなど不可能であった。

#### 二 思いを伝える詩文字との出会い

ミニ文字	小文字	中文字	大文字	特大文字
あ	あ	あ	あ	あ
中太線文字	極太線文字	二重線文字	波線文字	二重波線文字
あ	あ	あ	あ	あ
丸文字	花丸文字	キラキラ文字	ピカピカ文字	涙文字
あ	あ	あ	あ	あ
くるくる文字	音符文字	ふわふわ文字	ドーンと文字	もっと言いたい文字
あ	あ	あ	あ	あ

全員の思いを大切にするとといっても、ひとつの表現に対して、全員の解釈を聞いていたのでは、指導時間を超過してしまう。そこで考えたのが、上の詩文字である。例えば、ミニ文字は教室が静かな状態でやっと聞こえるような声、それに対して、特大文字は叫ぶときのような声の大きさである。太線文字は、「強い気持ちを伝えたい」とき、二重線文字は、「不思議な感じを伝えたい」とき、波線文字は、「相手に対する恐れを表す」ときに使う。丸文字は、「うれしい・幸せな気持ちを伝えたい」ときに使い、その感情がさらに強くなると花丸文字となる。また、くるくる文字は、「ユニークな感情を伝えたい」ときに、音符文字は、「歌いたくなるように楽しい」ときに使うなど、楽しさやうれしさでも変化を付けていった。

このような創作文字を使えば、三つの利点があった。一つ目は、子どもが間違えることを気にせず、自分なりの解釈を進められるこ

とである。二つ目は、その解釈にした根拠を書く時間を短縮できることである。三つ目は、詩文字自体が音読をする際の楽譜のような役割を果たすことである。

### 三 詩文字を使った作品

授業では、金子みすゞ氏の作品「ふしぎ」を扱った。この子は「ふしぎでたまらない」という表現を中心に見ていることがわかる。

ふしぎ

わたしはふしぎでたまらない、  
黒い雲からくる雨が

銀にひかっていることが

わたしはふしぎでたまらない

ま青いくわの葉たべている

かいこが白くなることが

わたしはふしぎでたまらない

たれもいらいぬ顔が

ひとりでゆらりと開くのが

わたしはふしぎでたまらない

たれにきいてもわらって

あたりまえたということが

「ふしぎ」の中太線文字も、「たまらない」の二重線文字も、後半にいくほど、どんどん大きくなっていることが特徴である。不思議でたまらないという気持ちが、増幅していく様子が見てとれる。

### 四 詩文字「音読発表会」

四月下旬に行った音読発表会は、授業参観とした。多くの保護者の前で緊張すると思いきや、まるでだれも観客がいないかのようになり、全員が堂々とそしてゆったりと音読することができていた。その理由を何人かに聞いた。

「詩の世界に入ること意識してきたので、本番も練習と同じように読むことができた。」

「自分の詩の読み方は良いという自信があったので、本番でもあわてることがなかった。」

参観した保護者の方にも感想を聞いた。

「全員がこれほど堂々と読めるのはすごいと思います。きちんと前を向くだけでなく、伝えようという気持ちにあふれていました。」

「同じような音読が一つもありませんでした。一人ひとり一生懸命考えたことが、よくわかりました。」

子どもたちは、詩文字を使ったり創ったりしていく過程で、詩の世界に身を置いていたようであった。そして発表会では、詩の世界

に完全に入り込んでいる様子が見てとれた。

### 五 おわりに

今までの詩の授業であれば、子どもたちは、「間違えたら、恥ずかしい。」

と思っていたであろう。だが、詩文字を創る過程で、間違いは存在しない。教師も、クラスの間も、間違っているという指摘をしない。その子がそう解釈したのであれば、その判断に口をはさむ権利などないからである。

だからこそ、創造的な音読につなげることも可能になった。

「こんな大きな声で読んだら、恥ずかしい。」

「こんな表情で読んだら馬鹿にされる。」

そんな様子は微塵も感じられなかった。

以前私は、子どもにもっと気持ちを込めて読むようにと、平気でその子の心を傷つける指示を頻発していた。だが、本実践を通して、子どもの力を引き出すことの大切さをあらためて感じさせられた。

さいとう ひろし 著書に『これからの「総合的な学習」—情報の活用力を育む—』（学文社）。「情報活用能力が育む話す力」（日本国語教育学会）など論文も多数。